



Title	「武漢ロックダウン」における社会関係の形成と変容 ： 近隣住民間の互助行為から
Author(s)	陳, 子昀
Citation	共生学ジャーナル. 2026, 10, p. 29-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「武漢ロックダウン」における社会関係の形成と変容

—近隣住民間の互助行為から—

陳子昀*

Social Relationship Formation and Transformation under the Wuhan Lockdown

Insights from Neighbor-to-Neighbor Mutual Aid

CHEN ZIYUN

論文要旨

本研究では、2020年1月23日から4月8日まで実施された「武漢ロックダウン」について、武漢市の住民（n=17）を対象に、半構造化インタビューおよび文献調査を実施し、近隣住民間の互助行為の形態と社会関係の形成・変容を分析した。その結果、ロックダウン下では、WeChatグループを通じた物質的交換（普通物資と特殊物資の贈与）と非物質的交換（情報共有・精神的サポート）が発生し、住民間の互助行為には一般交換としての一般的互酬性があったことが示された。これにより、信頼・規範・ネットワークからなるソーシャル・キャピタルが急速に醸成され、社会的連帯が強化された。特に、特殊物資の交換は住民間の共通属性を可視化し、関係の持続性を促進した。

キーワード ロックダウン、社会関係の変容、互助行為。

Abstract

This study analyzes the forms of mutual aid behaviors among neighboring residents and the processes of social relationship formation and transformation during the Wuhan lockdown from January 23 to April 8, 2020 (76 days), based on semi-structured interviews with 17 residents in Wuhan, Hubei Province, and a literature review. Under the lockdown, material exchanges and non-material exchanges occurred primarily via WeChat groups, characterized as generalized exchanges in social exchange theory with altruistic reciprocity. This rapidly fostered social capital consisting of trust, norms, and networks, strengthening social solidarity. Notably, exchanges of special goods visualized shared attributes and promoted relationship sustainability.

Keywords: Lockdown, transformation of social relationships, mutual aid.

* 大阪大学人間科学研究科博士後期課程 cyouko918@gmail.com

1. 研究背景

2019 年 12 月頃、湖北省武漢市は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の拡大の震源地となった。ウイルスの感染は市内から中国大陆全土へ大規模に広がり、国境を越えて他の国や地域にも拡大した。急速に拡散が進んだこのような状況下で、初期段階では有効なワクチンや治療薬がなかったことを背景に、中国政府は武漢市において 2020 年 1 月 23 日にロックダウン⁽¹⁾を実施した。

武漢市という約 1100 万人の人口を擁し、経済・交通のハブとして機能する巨大都市全体を封鎖したことは、公衆衛生史上で前例のない事例である。こうした未曾有の非常事態において、住民たちは高い緊張と不安状態に置かれ、物理的・社会的距離の確保を強いられる新しい生活様式を余儀なくされながらも、日々の生活を営み続けなければならなかった。このような状況は、既存の社会構造に深刻な影響を及ぼし、住民間の関係性を根本的に変容させる要因となったと考えられる。

1.1 「武漢ロックダウン」の施策まとめ

「武漢ロックダウン⁽²⁾」は、2020 年 1 月 23 日から 4 月 8 日まで計 76 日間続いた。ロックダウンに伴う公的衛生管理対策は、複数回にわたり追加・改善が行われた。以下では、武漢市衛生健康委員会ホームページ、大久保 (2021)、大津山ほか (2020)、(陳 2024) を参考に、ロックダウン施策の変遷を整理する。

まず、武漢市政府は 1 月 23 日午前 10 時より市内への出入りを制限し始めた。武漢市内の空港、鉄道駅、フェリー、バスおよび地下鉄が営業停止となり、閉鎖された。また、2020 年 1 月 24 日、25 日には、工場等の操業停止の措置が取られ、公共バスの運営停止など、移動手段も厳しく制限された。さらに、1 月 26 日から市民が自家用車で外出することが禁止された。感染状況が深刻化した 2 月 11 日から、武漢市は管理を強化し、住民の外出を原則として禁止する「小区⁽³⁾封鎖」を開始した（「武漢市新冠肺炎疫情防控指揮部通告（第 12 号）」2 月 11 日 0 時付で公布）。この措置により、武漢

市民約 1 千万人が外出禁止に近い状態となり、市民の生活は必要最低限にとどめられた。

そして、4 月 8 日 0 時、武漢を離れる道路の管制措置が解除され、武漢における高速道路のインターチェンジ、空港、鉄道の駅も一斉に営業を再開した。これによって武漢のロックダウンは、開始から 76 日目に解除された。

1.2 住民が直面した生活環境と制約条件

規制は多岐にわたったが、一般人の日常生活に最も影響を与えたのは、2 月 11 日からの「小区封鎖」である。小区の出入口は、一律に 1 カ所のみとし、古い小区やオープンな小区の場合、フェンスにより強制的に外と隔離され、出入り口は 24 時間体制で警備されるようになった。必要不可欠と指定された業種、職種（医療関係者や警察、ボランティアなど）を除く全住民に対して自宅待機が求められた。住民は特別な理由がない限り、小区から離れてはならず、生活必需品も集団購入し、政府が指定する業者により配送される配給制となった（陳 2024）。

その間、小区ごとの財力や管理能力には大きな差があり、住民たちの個別に異なる「特殊ニーズ」に対して、統一された管理基準が存在しないため、小区によって外出制限の厳しさが異なっていた。また、感染症の最大の特徴として、猛威の対象が目には見えないが故に、心理的にも大きな恐怖感や不安感を掻き立てられやすいと松本・太田（2021）は指摘している。

当時、筆者の母は一人で武漢市に封鎖されていた。母との会話から、このような緊急事態下では全ての人々が困難に直面するものの、そのなかで住民同士の互助⁽⁴⁾が顕著に表れていることに気づいた。そして、その社会的意義への関心が、本研究を立ち上げる契機となった。

1.3 本研究のリサーチ・クエスションと研究目的

本研究のリサーチ・クエスションは、「武漢ロックダウン」において、住民間の互助行為はどのように発生・展開し、それが社会関係の形成と変容にどのような影響を及ぼしたのかである。よって本研究の目的は、住民間の自発的な互助を中心とした分析を通じて、危機状況下での社会関係再編のメカニズムを解明することにある。

筆者の先行研究（陳 2024）では、「武漢ロックダウン」が災害弱者に特

有の影響をもたらしたことを明らかにし、とりわけ彼らが経験したストレス要因やスティグマ化の問題を分析した。しかし、そこでは災害弱者を「影響の受け手」として描き出すことに重点が置かれ、住民同士の相互行為が社会関係の再編にどのように寄与したのかという点は十分に解明されなかった。また、先行研究では、物資や情報の交換が住民関係を変化させ、助け合いが人々の距離を縮める可能性も示唆され、互助の萌芽は確認できたと考えられる（陳 2024）。しかし、それはあくまで副次的な論点にとどまっていた。したがって本研究は、この知見を踏まえて互助行為そのものに焦点を当て、分析対象とすることで、ロックダウン下における社会関係の形成と変容を包括的に明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と理論的枠組み

本章では、住民間の互助行為と社会関係の変容を分析するための理論的枠組みを構築する。まず、ロックダウンや災害時の社会関係に関する先行研究の動向を概観し、次に互助行為の理論的視点を社会的交換理論とソーシャル・キャピタル（以下、SC）理論を中心に整理する。

ロックダウン下の住民間の互助行為については、食料や医療物資、情報や感情的支援といった「資源のやり取り」として現れ、返礼を伴わない贈与が多く観察された。これは、社会的交換理論における一般交換や互酬性の枠組みで分析することが適切であることを示している。また、こうした交換は一過的な取引にとどまらず、信頼・規範・ネットワークといった SC を生成し、社会関係の再編と共同体意識の醸成に寄与した。すなわち、交換理論が「互助の発生過程」を説明するのに対し、SC 理論は「互助がいかにして社会的連帯を強め、持続的な関係へと発展するのか」を説明する上で有効である。

そのため、本研究は両理論を補完的に組み合わせることで、危機状況下での互助行為が社会的交換を通じて社会関係と社会連帯を再編成するメカニズムを解明する。

2.1 大規模災害時の社会関係に関する研究動向

ロックダウンは大規模災害として、日常の生活様式と規則を破壊し、アノ

ミー状態を生じさせられると思われる。しかし、多くの災害社会学研究は、災害後の混乱を単なる無秩序として捉えるのではなく、災害への適応過程に注目してきた。具体的には、組織や集団が緊急ニーズに応じて柔軟に対応し、人々が極限状況のなかで新たな規則を生み出す可能性が指摘されている。とりわけ Shibutani (1986) は、災害時には既存の秩序が動揺する一方で、組織や集団が役割や手続きを組み替え、状況に即した規則が生成されていく過程が生じると論じる。さらに野田 (1990) は、こうした秩序生成を支える基盤として「災害下位文化」が機能するとする。災害下位文化とは、平時には潜在している価値・規範が災害時に顕在化した体系であり、即興的な集団や創発組織の形成を方向づける。野田は、この体系が災害対応を促進する場合もあれば、状況によっては阻害する場合もあると指摘する。渥美 (2017) は、災害ボランティア論の再構築を提唱し、交換様式のダイナミクスから、遊動化と秩序化のドライブがボランティア活動を形成することを論じ、現代社会の制約下での連帯可能性を探る。王・稲場 (2019) は、創造的即興を災害時の支援活動の鍵とし、既存の計画を超えた柔軟な対応が被災地の回復力を高めると強調する。これらの知見は、災害時における創造的即興の重要性を明らかにしている。

ロックダウンは通常、人々を分断し、孤立を強いるように思われるが、重要な点は、ロックダウンがもたらした分断は身体的・生理的なものに過ぎず、人間の社会性そのものは解体しないということである。面会制限が続くなかでも、ネットワークの利用により不安を軽減できると清田 (2023) は指摘する。非常事態には、人々が共通の問題解決のために立ち上がり、その過程で相互関係の心や連帯感が生まれる (稲場 2011)。小川・オガワ (2021) は、アナキズム的視点から災害ユートピアを議論し、無秩序状態が利他的行動と創造的共同体を生むことを指摘している。

2.2 互助行為に関する理論的視点

本研究は互助行為の分析枠組みとして社会的交換理論を採用する。この理論では、人間関係を資源 (時間、情報、感情、物質など) の交換プロセスとして捉え、個人は代価に応じた報酬を期待すると考える (Homans 1961)。また、Blau (1964) は、交換が双方の合理的需要を満たすときに持続すると論じる。本稿では、この観点を手掛かりに、第5章で互助行為が持続した要

因を事例に基づいて検討する。

交換形態の整理にあたっては、Lévi-Strauss (1949=1977) が提示した「限定交換」と「一般交換」の区分を用いる。限定交換が二者間での直接的な授受(渡し手と返礼先の一致)で完結するのに対し、一般交換は三者以上の成員間で授受が連鎖する形態を指し、渡し手と返礼先が一致しない点に特徴がある。一般交換は、成員間の相互信頼を醸成し、社会的な統合機能を創発的に発揮する性質を持つことから、多くの先行研究においてその重要性が議論されてきた (Ekeh 1974=1980; Gillmore 1987; Molm et al. 2007; 稲葉・高橋 2012、三谷 2015)。とりわけ Ekeh は、一般交換が社会統合に寄与するメカニズムを理論化し、その内部形態を精緻化した。その代表的なものとして、個人の資源提供が鎖状に連鎖する「鎖状一般交換」と、給付と返礼の対応を特定の二者関係に閉じず、集団・ネットワークを媒介として交換を拡散させる「網状一般交換」が挙げられる (Ekeh 1974=1980:252-260)。

ここで重要なのは、交換形態には、それを支える互酬性(返しのある方)という規範が伴う点である。互酬性は、支援の授受が「何らかの返しへの期待」や「返すべきだという了解」と結びつくことを指し、返礼が当事者間で直接に返る場合に限らず、共同体内部で別の成員へ連鎖しうる場合も含む。したがって、互助を交換として捉えることは、互助に内在する互酬性を規範の形成・共有の過程として把握することでもある。

互酬性の理解にあたっては、Sahlins (1974) が提示した互酬性の三類型、すなわち①一般的互酬性・②均衡的互酬性・③否定的互酬性が参照できる。①一般的互酬性とは、返礼の時期や等価性が厳密に定められず、当面は見返りを求めない供与が容認される互酬性である。②均衡的互酬性とは、一定の時間幅のなかで相応の返礼が期待される互酬性であり、等価性への志向が相対的に強い。③否定的互酬性とは、返礼の均衡よりも自己の取り分の最大化が優先され、相手に不利な交換を志向しうる互酬性を指す。

一方、SC 理論では、信頼・規範・ネットワークが、協力を可能にする条件(資源)として位置づけられる (Coleman 1988; Putnam 2000=2006)。一般交換は、返礼が直接に戻らないという不確実性を含むため、その成立には他者への信頼が要請される。また、互酬性は「どのように返すべきか」という了解として規範を形成し、その規範がネットワーク上で共有されることで協力は再生産されると考えられる。したがって本研究は、一般交換を媒介と

して信頼・規範・ネットワークが相互に結びつき、協力を可能にする資源としての SC が形成されるプロセスに焦点を当てる。

さらに、SC には異質な者同士を結びつける橋渡し型 (Bridging) と同質な者同士が結びつく結束型 (Bonding) の区別がある。過去の実証研究によれば、結束型は、結束を強化する傾向があるが、橋渡し型は、情報の伝播や評判の流布において強い外部性を持つとされている (稲葉 2011)。また、Hawkins & Maurer (2010) はハリケーン・カトリーナの事例を分析し、結束型資本が近隣支援を、橋渡し型資本が外部資源の動員を可能にすると指摘している。

以上を踏まえ、本稿は、危機状況下における住民間互助を社会的交換として分析し、交換形態と互酬性の観点からその展開を整理する。あわせて、互助の継続が信頼・規範・ネットワークとしての SC の形成へいかに接続するのかを検討する。

3. 調査の詳細：「武漢ロックダウン」における互助の実態

3.1 調査の概要

本研究は、ロックダウン期間中の住民間の自発的な互助行為に焦点を当て、社会関係の形成と変容を考察することを目的とした。調査では、「武漢ロックダウン」を経験した 17 名の調査対象者に対し、2023 年 9 月から 2024 年 3 月にわたり、各約 60 分間の半構造化インタビューを実施した。

本研究では、調査対象者の抽出にあたりスノーボールサンプリングを採用した。その理由は「武漢ロックダウン」の経験者に無作為にアクセスすることは困難であり、また体験は個人的かつセンシティブな記憶を含むため、既存の知人関係を介して紹介してもらうことで調査者への信頼を確保することが可能となるからだ。

武漢市では行政区ごとに感染状況が異なり、これに伴って小区の封鎖措置の厳格さにも地域差が生じた。また、小区の管理体制 (管理会社の有無、ゲート管理の徹底度など) によっても、住民が実際に経験した封鎖の具体的措置は異なりうる。本研究では、小区ごとの封鎖管理の差を、対象者の語りに即して「住民が経験した実質的制約の強さ」として把握する。

さらに、本研究では年齢・性別・職業の多様性を確保するために層化抽出を併用し、偏りを軽減するよう努めた。これにより、互助行為の多様な形態を幅広く把握することが可能になった。

表 1 調査対象者

項目	年齢	性別	職業	居住地	項目	年齢	性別	職業	居住地
A	39	男	社員	新洲区	J	29	女	学生	洪山区
B	46	女	公務員	武昌区	K	52	女	主婦	武昌区
C	55	男	定年	江岸区	L	48	男	企業主	漢陽区
D	27	女	教師	江岸区	M	60	男	定年	武昌区
E	32	女	社員	江岸区	N	53	女	社員	洪山区
F	75	女	定年	江岸区	O	42	男	自営業	洪山区
G	39	女	保育士	江岸区	P	30	女	自営業	江岸区
H	64	女	職員	江岸区	Q	50	男	社員	漢陽区
I	60	女	定年	江岸区					

3.2 分析手法

分析には定性的コーディングを用いた。計 1187 分の録音データを逐語化し、①互助から得たもの、②互助時の連絡・調整の方法、③解除後の関係の継続の有無、に関する語りを抽出した。抽出箇所は意味単位で区切ってコード化し、コード間の共通性に基づいてサブカテゴリー・カテゴリーへ統合することで、互助の形態と関係変容のパターンを整理した。

また、本研究は得られたプロットを当事者の物語として意味づけるため、ナラティブ・アプローチによる分析を行うのが妥当である。インタビューでは、まず対象者にロックダウンの経験や参加した互助行為を聞き、出来事相互の関係や意味を示す言葉に注目した。対象者には自分の考えや経験について語ってもらい、対象者による主観的な解釈を重視した。ロックダウン前後の生活様式の比較や、対象者の年齢、職業、居住地域、健康状態などを背景として、インタビューでの語りを一連のナラティブとして捉えた。

3.3 調査結果

ロックダウンにおける物質的または非物質的な交換は、多様性に富み、それは異なる互酬性の形態や交換タイプに基づいていた。本研究では、互助でやり取りされた物資を「普通物資」と「特殊物資」に区別して議論を行う。普通物資とは、多くの住民に共通して必要とされ、代替可能性が高く、提供や受領の際に受け手の属性が必ずしも特定されない物資（例：一般的な日用品・食料品）である。これに対し特殊物資とは、特定の属性（妊婦、乳幼児の養育者、慢性疾患を抱える者、ペット飼育者等）に強く結びつき、他の物資で代替しにくく、入手経路が限定されやすい物資を指す。

表 2 カテゴリー「互助の形態」

サブカテゴリー	コード
住民間の物資贈与（普通物資）	自分が栽培した野菜をシェアした/お隣さんに塩、薬、リブなどの食べ物/兄にごはん/近隣から大量の食べ物/近隣から本/近所のおばあさんに野菜/近隣から砂糖/友達に薬/近隣の老人に牛肉、リブ、卵など/近隣に体温計/近隣の老人に食料品を送った
住民間の物資贈与（特殊物資）	小学校 1 年生の教科書/キャットフード/粉ミルク/葉酸
非物資サポート	精神サポート/近所の人たちが一緒に猫を探してくれた/コロナに関する情報の共有/友達のため医療資源を探す/ネットで医者と連絡し、不安が払拭された/親戚がコロナで亡くなった友達を皆が慰めた

表 3 カテゴリー「関係の形成と持続性」

サブカテゴリー	コード
住民間の物資贈与（普通物資）	近所の人と知り合いになった/以前は会っても挨拶しなかったが、今は笑顔で挨拶するようになった/コロナが明けたら連絡がなくなった/ほとんどない
住民間の物資贈与（特殊物資）	同じ小区の母とママ友になった/ペット互助グループに招待した/同じ妊婦である近所さんと友達にな

	った
非物資サポート	旧友の再連絡/みんな温かいと感じる/昔の同級生グループで慰め合い/30 年ぶりの同窓会まで開かれ/子どもの頃の旧友と交流を再開した

4. 互助行為の実態

カテゴリーをそれぞれ考察する前に、本章では、調査の結果を鑑み、ロックダウン下で異なる時期に展開された互助の形態を分類し、それぞれの特徴を示す。

4.1 物質的交換

具体的な住民間の互助行為を分析する前に、本節ではロックダウン期間中における住民の物資保障を簡単に記述する。ロックダウン期間中における住民の物資の入手ルートは、主に以下の 4 種に分類される：①事前備蓄、②政府による物資配給、③團購⁽⁵⁾、④近隣住民間の互助（主に贈与）。また、本調査から得られたデータに基づくと、ロックダウン期間中の物資の供給源の変化は次のようにまとめられる。最初は一切の物資配給がなく、住民の生活基礎物資の主な源は事前備蓄であった。約 1～2 週間後、政府による物資の無償提供（配給）が開始され、團購もこの時期に徐々に流行し始めた。ただし、團購システムの構築初期は購入可能な物品の数量と種類がともに少なかった。しかし政府による物資管理の最適化および團購メカニズムの漸次的成熟に伴い、團購は基本的に「一般ニーズ」をカバーできるようになった。依然として政府による「個別ニーズ」の充足は保証されていなかったものの、住民間の自発的な互助行為は、ロックダウン全期間を通じて観察された。

これらの調査結果に基づき、本稿ではロックダウンを初期・中期・後期の 3 段階に分け、それぞれの時期における互助行為の実態を考察する。小区によって実施された政策は異なるため、ロックダウンの期間のうち、各個人がどのタイミングで特定の時期に入るかは一様ではない。したがって、本稿における段階分けの基準は物資の供給源および需要が充足されるかどうか、

とする。ただし、この区分は客観的状況の整理にとどまらず、対象者の語りにみられる主観的経験の推移とも概ね対応していた。例えば多くの対象者は、配給や團購が始まる前後を境に「最初の頃は先が見えなかった」「配給が始まってから少し落ち着いた」といった形で時期差を語っていた。表4では、供給・需要の変化を軸にしつつ、必要に応じて住民の語りから確認できる心理的側面も補助線として示す。

表4 ロックダウンの時期分け

時期	政府	團購	一般ニーズ	個別ニーズ	主観的危機認知
初期	なし	なし	×	×	不安の強さ
中期	あり	あり	○	×	見通しの形成
後期	あり	あり	○	○	切迫感の和らぎ

注：「×」とは満たされていない状態であり、「○」とは概ね満たされている状態である。主観的危機認知は段階分けの基準ではなく、インタビューで反復的に語られた傾向を整理したものである。

初期（1月23日-2月上旬）は、一切の物資配給がなく、備蓄物資のみに頼り、支援体系が不十分で、「一般ニーズ」を満たすことが困難であった。中期（2月上旬-3月中旬）は、政府配給と團購の支援体系が初歩的に形成されたが、「一般ニーズ」のみを満たすに留まり、量と種類がともに少なく、「個別ニーズ」は十分に満たされていなかった。後期（3月中旬-4月8日）は、政府配給と團購の支援体系が基本的に形成され、「一般ニーズ」が保証され、「個別ニーズ」の需要もある程度満たされるようになった。

4.1.1 初期：不安の拡大

調査対象者の多くは、ロックダウン初期の1～2週間に強い不安を経験したと語る。生活リズムが突然断ち切れ、物資供給の見通しが立たないことが大きな要因である。Pさんは次のように述べた。「最初の1週間は非常に不安で、自分たちが見捨てられたのではないかと感じた」。Kさんも同様に、食料不足や感染拡大の不確実性に強い不安を抱き、「父の友人が感染し、父が病院に付き添ったが、その人は亡くなった。父も感染してしまうのではないかと一晩中眠れなかった」と語った。

F さんは、初期段階において互助行為に参加した唯一の対象者である。75 歳の彼女は、一人暮らしの 88 歳の兄と同一の小区に住んでいたが、兄は脚が不自由な障害者であり、スマホも使用できないため、ロックダウン期間中の生活は F さんに全面的に依存せざるを得なかった。また、彼女の娘は尿毒症を患っていたため、F さんは娘を病院に送って透析治療を受けさせるため、初期段階においてもリスクを冒して頻繁に外出し、同時に物資の調達と兄の世話を並行して行わなければならなかった。そのような状況を、F さんは次のように述べている。

ボランティアもおらず、政府の人々も手伝ってくれない。皆が疫病の蔓延を恐れていた。（中略）うちの状況が大変だと知っていたのは上の階の隣人だけで、野菜を少し玄関先に置いてくれた（F さん）。

「武漢ロックダウン」の初期段階では、疫病の蔓延が深刻であり、住民のウイルスに対する未知の恐怖および物資保障の不確実性から、大部分の住民は控えめな行動をとっていた。初期の物資交換行為は極めて稀にしか発生せず、政府の支援活動さえも実施できず、住民の日常的な社会的交流が急激に制限された。結果として、住民は新たな交換形態を模索せざるを得なくなり、WeChat による互助行為の出現が促された。

4.1.2 中期：近隣住民間物資の贈与の活発

政府による物資配給と WeChat による團購は、中期における主要な物資供給源となった。物資配給は主に中央政府の負担によって実施され、本調査においても全ての対象者が政府からの物資を受け取ったと回答している。しかし、その支援は安定せず、時間的・地域的に大きな格差が存在した。ある対象者は政府配給の物資が種類豊富で質も良いと語る一方、別の対象者は量も種類も不足していたと指摘している。対象者の語りには、初期に比べて切迫感がやや弱まり、「少し落ち着いた」「見通しが立った」といった表現がみられる。

物資不足により、当初の團購はセット内容や量が固定されており、自由に選択できなかった。そのため、ロックダウン中期における食料や医療物資の入手は非常に受動的であった。

その團購はどのセットを買うかしか選べず、白菜や肉、米などがセットで組まれていて（C さん）。

食べたいものが手に入らないことが多かった。例えば魚は何か月も食べられなかった。ようやく魚を買えたとき、その味は死ぬほどおいしかった（K さん）。

物資不足の状況下で、住民同士の自発的な物資共有が多数確認され、それは重要な役割を果たしていたことが分かった。物資の贈与には 2 つの形態がみられた。第一は公共空間に設置された物々交換箱である。近隣住民による自発的な食料の共有やお裾分け、貸し借りが行われ、例えばエレベーターやロビーに置かれた箱に不要品を入れ、自由に持ち帰れるようにする事例があった。ただし、「武漢ロックダウン」ではウイルスへの不安や物資逼迫のため、この形態は比較的少なかった。一方で、後の上海ロックダウンでより一般的に見られるようになった（Zhou & Dong 2023）。

第二の形態は、WeChat グループを通じた一対一の物資贈与である。本調査では、全ての対象者が自らの小区のグループにおいて物資交換が発生していたと回答しており、そのうち 11 名の対象者が少なくとも一度は近隣住民との物資交換に参加していた。ここには他者からの贈与の受領と、自ら他者へ贈与する行為の双方が含まれる。また、感染拡大防止の観点から、交換の際には非接触的な方法が選好されたことが特徴的である。E さんは以下のように語った。

当時は家で持ち手無沙汰で、多くの人が料理を学び始め、包子やパンを作っていた。ある家庭には小麦粉がなく、別の家庭には砂糖がない。そこでグループで声をかけ合い、互いに融通していた。（中略）小さい子どものいる家庭はお菓子を欲しがり、同じ建物の住民が分けてあげることもあった。（質問：どのように渡していましたか？）玄関に置いて取りに来てもらうとか、相手の玄関に掛けておくなど、接触を避ける方法だった（E さん）。

さらに注目すべき傾向として、贈与する側は見返りを期待せず、受領する側も返礼の義務感を抱かない事例が複数確認された。このような「無償の供与」に基づく利他的行為は、社会的交換理論における一般的互酬性の概念と関連づけて理解することが可能である（5.1.1 で後述）。

4.1.3 後期：特殊物資の交換

後期においては、政府は資源を再配分することで、生活物資を比較的安定的に供給できるようになった。さらに各小区における團購を通じて個人まで物資を届けるシステムも整えた。その結果、後期における「一般ニーズ」は概ね解消され、対象者も後期には食料や医薬品などの基本的な生存資源に不足がなかったと報告している。実際、対象者からは、初期に比べて切迫感が和らいだことを示す記述がみられる。例えば Qさんは、後期には「毎日の新規感染者数が徐々に減り、基本的な生活物資もそれほど不足しなくなったので、初期ほど緊張しなかった」と述べている。しかし、個別的かつ深層的なニーズについては依然として十分に満たされておらず、こうした「個別ニーズ」に関わる呼びかけや融通が、後期には相対的に目立つようになった。

資源が不足している状況下では、まず「一般ニーズ」を優先的に確保することは当然の判断である。しかしながら、「個別ニーズ」の緊急性は決して低くはない。特に後期に入ると、多くの住民は蓄えた物資がほとんど尽き、例えば妊婦が必要とする栄養補助剤や乳幼児のオムツ、ペット用品など、「個別ニーズ」に対応する物資は依然として入手困難であった。このため、住民は WeChat を基盤とした互助ネットワークに大きく依存せざるを得なかった。

本調査の対象者のうち 2 名はペットを飼育していたが、いずれもペット関連物資の優先度は低く、十分な供給を受けられなかったと語った。例えば猫砂やキャットフードなどの用品は流通が滞り、入手は困難であったが、WeChat グループを通じた互助により確保したという。Oさんは次のように述べている。

キャットフードがもうすぐなくなるとき、娘もすごく困っていたが、團購では売っていなかったもので、小区のグループで聞いたところ、幸い近所の方がたくさん備蓄していて少し分けてもらえた (Oさん)。

また、Jさんはキャットフードの共有をきっかけに、同じ小区で猫を飼育する多くの隣人と知り合い、彼らを (ペット専用の) 互助グループに招待した。Jさんは以下のように語った。

小区のグループでペット用品を求める人がいるのを見て、私はそのグループのリンクを小区のグループに共有したところ、多くの飼い主が参加した。（中略）私の友人もキャットフードが手に入らず、彼の小区には販売者がいなかったため、私は彼を小区のペット専用グループに招いた。印象的だったのは、彼の小区の管理が非常に厳しかったため、最終的に彼に頼んでキャットフードを米に偽装し、小区まで届けてもらったことだ（Jさん）。

猫の飼育は犬に比べて飼育者同士の交流が少ないこともあり、調査データからも、同じ小区に住んでいてもロックダウン前には猫飼育者同士の交流や連絡がほとんど存在しなかったことがうかがえる。そのため、「武漢ロックダウン」は、同じ関心をもつ住民同士が相互に接触し、関係を構築する契機となったことが示唆される。

さらに、妊婦である E さんも、グループ内で助けを求めている別の妊婦に支援を行ったことを報告している。E さんは次のように述べている。

グループで、ある妊婦が葉酸の補充が必要だと投稿していた。私も妊婦で、自宅に備蓄があったため、彼女を助けることができた（Eさん）。

これらの事例から、後期においても物資がある程度確保されていた状況下で、住民間の「個別ニーズ」に基づく互助行動は引き続き活発に行われていたことが分かる。この背景として、中期までに形成された信頼感や実践的なつながりが、後期の互助を下支えしていた可能性が示唆される。

4.2 非物質的交換

4.2.1 情報共有：感染情報や購買ルートの情報交換

住民は WeChat グループ内で、パンデミックや生活に関する情報を共有していた。例えば、購買ルートの共有やパンデミックの動向についてである。團購は、一部住民が持つ仕入れの人脈を活用し、それを情報としてグループ内で共有することによって成立した。同様に、「個別ニーズ」に対応した互助グループ、例えば前述の J さんが参加していたペット互助グループの出現もこれに当たる。

以前から知っていた八百屋があって、ロックダウンで小区が閉鎖されたことで野菜が売れずに店で腐りそうになっていた。私自身も小区の中で買えなかったのも、小区の WeChat グループでその店を紹介した。買いたい人は私を友達追加して一緒に注文し、彼がまとめて小区の入口まで届けてくれるようになった（H さん）。

以前、ペットショップの人と知り合いだった。店は営業できず在庫も売れずに困っており、私たち飼い主はキャットフードが手に入らなかったため、利害が一致した。当時、彼はペット救助専用のグループを作っており、ペット用品の販売だけでなく、家に残り残されたペットの救助も行っていた（J さん）。

このように、團購は橋渡し型 SC を活用した経路であり、グループ内部での共有によって物資不足を解消し、一体感の醸成をも促進したことが明らかになった。

4.2.2 精神的サポート

小区のグループチャットは、情報共有を共同で担うだけでなく、精神的な支えの機能も果たしていた。精神的サポートに関しては、オンラインでの会話や励まし、感情的なつながりの維持について、多くの対象者が言及している。多くの対象者は、ロックダウン期間中にネットワークを通じた他者との交流頻度が増加したと報告しており、接触対象には家族、親戚、友人、同小区の住民、オンライン上の知人などが含まれる。こうした接触の主な目的は、情報共有や相手の安全確認、さらに不安の軽減であった。L さんは「私は携帯電話の連絡先に登録してある全員に、安否を気遣うメッセージを送った。全員から返信があったことをよく覚えている」と語った。D さんは喘息を患っており、長年連絡を取っていなかった旧友から安否を尋ねるメッセージが届き、温かさを感じたという。D さんは以下のように語った。

あの時、友人と話をしなければ、日々がとても辛かった。特にロックダウンが決まった直前の数日間は恐怖感で一杯で、その恐怖を発散する場所もなかった。（中略）当時は高頻度で人と連絡を取っていた。何もすることがなく、ロックダウンがいつ終わるかも分からない状況は、本当に怖かった。（中略）友

人と連絡を取っていなくても、友情は途切れていない。必要なときに助けてくれると分かると安心できる（D さん）。

J さんは、ロックダウンにより日常の不確実性を強く認識し、友人をより大切にしたいという意識が高まったと述べている。また、Q さんは、長らくやりとりがなかった同級生とグループチャットでのやり取りが活発になったことで、学生時代を思い出したことを報告している。ロックダウン後には 30 年ぶりの同窓会が開催され、学生時代の旧友と再び交流するようになり、現在も週末に釣りや飲み会などを共にする関係が継続しているという。また、N さんは以下のように述べている。

以前は学校に行く人は学校へ、仕事に行く人は仕事へと、それぞれ連絡は少なかったが、ロックダウンで小区や同僚間の連絡も WeChat を通じて行われ、健康を気遣う気持ちが純粋に伝わった。以前のような仕事のためだけの連絡ではなく、より親密な関係を感じた（N さん）。

このように、精神的支援を介した互助は、ロックダウン期間中の社会関係の再構築・回復の契機として機能したと考えられる。さらに、ネットワークを通じて自発的に組織された活動やキャッチフレーズは、精神的サポートに大きく寄与した。複数の対象者は、オンライン上で掲げられた「武漢頑張れ」のような励ましのキャッチフレーズに感動したと述べた。H さんは、住民が時間を合わせて一斉にドアを開け、歌を歌うといった「結束力」が生まれたことが印象的であったと述べている。

ある夜、WeChat グループで呼びかけがあり、特定の時間になると全員が電気を消し、懐中電灯だけで外の窓に向かって「武漢頑張れ」と叫ぶことになった。その時私はとてもワクワクし、全身に力がみなぎっていた。武漢の人々はより団結したと感じた（H さん）。

I さんもまた、ロックダウン期間において、小区の WeChat グループで住民が協力して飼い猫を探す様子に接し、温かさを感じたと述べている。

ドアを開けたときに猫が逃げ出してしまって、上の階も下の階も階段も全部探したけど見つからなくて、小区の外にも出られないから、小区の中を探しても見つからなかった。毎日泣いてもう必死だった。そこでグループにお知らせを出して、猫の写真を送って、「この猫を見かけたら絶対捕まえて教えてください」って呼びかけた。（中略）グループチャットの人たちも一緒に呼んでくれるようになって、下に降りたついでに探してくれる人もいてさ。その数日間、小区中に「ミミ～！（うちの猫の名前）」って声が響いてた（I さん）。

これらの事例からは、精神的支援を伴う互助は、個人の不安を軽減するだけでなく、具体的な行動を通じてコミュニティの情緒的つながりや集団の結束力を強化することが明らかになった。

5. 考察

5.1 社会的交換としての互助

ロックダウン初期の社会的断絶と不安の拡大は、住民の日常的な社会関係を一時的に崩壊させ、生活必需品の入手や医療へのアクセスが困難となる状況を招いた。この状況下で、住民たちは SNS を活用した新たな互助行為を急速に生み出した。本章では、これらの行為について、先行研究で論じた社会的交換理論の観点から考察する。

5.1.1 交換形態と互酬性

交換形態に関して、ロックダウンにおける住民間の互助行為は、特定の個人ではなく、小区内の不特定多数を対象としており、本研究で観察された事例は一般交換として位置づけられる。WeChat グループは小区共同体内で展開していたため循環範囲は共同体内に限られたが、返礼先が特定の提供者や「次の一者」に固定されていたわけではなく、支援する側・受ける側が入れ替わりながら資源が拡散していた。したがって観察された交換形態は鎖状ではなく、網状一般交換として理解するのが妥当であろう。

この交換形態に伴う互酬性について、WeChat グループを通じた物資の提供は無償で行われることが多く、即時的な返礼義務は弱いことが明確に観察された。例えば、送る側である B さんは「（相手が）返すことなど考えな

かったので、友達追加もしなかった」、受ける側である N さんは「（返礼は）考えなかった。当時相手の部屋番号さえ覚えなかった」と語る。その理由として、いずれも災害の特殊性と緊急性を理由に挙げていた。これは Sahllins (1974) のいう一般的互酬性、すなわち厳密な等価性を伴わない利他的行為に相当する。Sahllins はこの概念を主として親族関係に基づく義務や身分的上下関係を念頭に論じたが、本稿では災害下の事例に適用し、見知らぬ住民同士の間でも一般的互酬性が成立していた点に着目する。

また、本研究で確認された多数の事例において、互助行為は単なる純粋な贈与ではなく、即時的な返礼を要請しない一方で、将来的に必要な時には相互に助け合う可能性（将来的返礼への潜在的期待）が想定されていた。例えば、K さんは「緊急事態だから（将来）誰かが困ったら私が助けると思う」と述べており、返礼義務の弱さは緊急性に起因すること、そしてそれにもかかわらず将来的な助け合いの見通しが共有されていたことが確認できる。とりわけ網状一般交換では資源が特定の二者関係に閉じず小区内に拡散するため、見知らぬ者同士であっても「情けは人のためならず」という見通しが共有されやすい。

加えて、Blau (1964=1974) は、交換行為が「社会的支援の充足」と「個人の期待満足」を通じて持続可能になると論じているが、本研究の事例でも、M さんの「こんな危ない時に、自分にできることで誰かの役に立てるって、やっぱり嬉しいと思うよ」という言葉に表れるように、互助参加者は心理的満足や承認感を得ており、互助行為を持続可能なものにしていった。

したがって、一般的互酬性に基づく互助は、将来的返礼の見通しと参加者の満足に支えられて継続し、その継続が小区内における SC 形成の契機となったと考えられる。

5.1.2 社会的連帯の発生

一方、Molm et al. (2007) は、交換形態に伴うリスクが連帯形成に影響を与えると指摘し、リスクが高いほど返礼がなされた際に強い連帯が生じると論じている。直接返礼が行われる限定交換に比べ、共同体を介した間接返礼である一般交換の方がリスクは高く、ゆえに強い連帯を生みやすいと考えられる。Ekeh (1974=1980)、三谷 (2015) が論じたように、一般交換は相互信頼を前提とした統合機能を有する。実際、「武漢ロックダウン」における住民間の一般交換も、相互信頼を前提とした統合機能を発揮し、稲葉・

高橋 (2012) の実験結果とも合致する。また、このような互助行為は、Titmuss (2018) の贈与関係論に示されるように、無償の互酬が社会的連帯を形成するプロセスとして理解できる。実際、物資の共有は匿名的な贈与を促進し、将来的な返礼可能性という互酬性の想定を通じてコミュニティ意識を高めた。感染情報の共有は全体の不安を軽減し、一般交換の要素を運びながら連帯を強化した。一方、Gillmore (1987) が指摘するように、返礼が必ずしも直接の提供者に向けられるのではなく、別の行為者を通じて行われるため、一般交換は高い信頼を必要とし、それ自体が強い社会的連帯の証となる。このメカニズムは、ロックダウン下の互助が単なる生存戦略にとどまらず、社会交換の進化形として機能することを示している。

以上の議論は、互助が社会的連帯を生みうることを示すと同時に、その成立の背後で「どのように返すべきか」という互酬性の理解が共有され、信頼やつながりが編み直されていった可能性を示している。

5.2 ソーシャル・キャピタルの形成

通常時の小区では、家族や親しい友人を中心とする結束型の関係が相対的に優位である一方、近隣住民間の橋渡し型の関係は必ずしも厚くない。ところがロックダウンは、移動制限と公助・市場機能の制約を通じて生活資源へのアクセスを断ち、既存の相互行為の前提を一時的に機能不全に陥らせた。この断絶のもとで、WeChat グループが情報とニーズを集約する場となり、創発的な規範が形成されたことで、短期間で SC が形成されたと考えられる。

具体的には、生活物資の團購や贈与、情報共有を通じ、従来は交流の少なかった住民間に互助の規範が形成され、新たな社会的ネットワークが生まれた。その結果、互助が隣人関係を質的に変容させた多くの事例が示された。J さんが「以前はエレベーターで沈黙していたが、今は互いの名前や趣味を知り合い、野良猫の話まで共有するようになった」と語るように、日常では疎遠だった隣人関係が互助を通じて親密で持続的なつながりへと変化した。具体例として、M さんは同じ小区に住む 82 歳の男性が團購を利用できないことを知り、食料を届けた。H さんは買い物が困難な高齢女性を支援する中で日常的に交流する友人関係を築いた。G さんは子どもを介したママ友関係を通じ、普段は希薄だった隣人間の接触を増やした。特に G さんはパン

デミック前後での関係性の変化を顕著に述べたため、その語りを以下に示す。

今はみんな防御心がけっこう強いんです。普段子どもを連れて外に出ても、ほかの家の人とはあまり付き合わず、それぞれ別々に遊んでいます。小区の中では、もともと知っている何人かの同級生以外とは、ほとんど接触がありません。（中略）（筆者注：小区の WeChat グループで、小学 1 年生の教科書を借りるやり取りがあり、それをきっかけに相手の母親と知り合い、友だち追加をした）彼女の息子はちょうど 1 年生で、うちの息子がこれから通う小学校と同じだったので、その時に友だち追加をしました。今でも時々一緒に遊ぶ約束をしています（G さん）。

これらの事例は、物資交換が単なる取引ではなく、互いを知り合い信頼を深める契機となり、疎遠だった隣人関係を新しい紐帯へと変容させたことを示している。このような新しい関係は、Granovetter (1973) のいう「弱い紐帯の強さ」としても理解できる。すなわち、日常では希薄であった隣人関係という弱い紐帯が、危機下において情報・資源の流通経路として機能し、異質な者同士を結びつける橋渡し型 SC の側面を強めたのである。I さんが言うように、「疫病のさなかに最も頼りになるのは身近な人であって、必ずしも家族ではない」のである。

さらに、外部からの支援・声援により、家庭や親族を超えた地域全体の結束が生まれ、住民の広範な共同体意識が醸成された。全国や世界各地から寄せられた支援メッセージは、個人に自らがより大きな共同体の一員であることを実感させ、隣人間の互助が都市・国家レベルの共同体意識へと拡張した可能性を示している。

5.3 ソーシャル・キャピタルの持続性

5.3.1 個人関係の解消と持続

一方、ミクロレベルでは、このような偶発的接触や利害の一時的な一致に支えられ、ロックダウン下で形成された「弱い紐帯」は、解除後に急速に解消される傾向を示した。生存保障が達成されたことで関係の意味が失われ、日常が回復し都市機能が復活すると共助の必要性も消えていく。例えば、C

さんが「あの人はロックダウン期間に知り合っただけで、今は特に連絡を取っていない」と語ったように、緊急時で生じた変化の大多数は「一時的特異事象」と認知され、緊急事態が終わると人々は日常への回帰を自覚し、自然に関係も解消したと考えられる。

しかし、本研究の新たな知見として、「個別ニーズ」に特化した特殊物資の交換に基づく関係は、一定の持続性を示すことが明らかとなった。これは、互助の形態が一般的な資源共有を超え、交換者の社会的属性（例：身分や共通の状況）を明らかにするプロセスを通じて、関係の深化を促すためである。E さんの事例では、妊婦特有の必需品である葉酸の提供を通じ、相手の社会的属性を認識し共有することで、信頼に基づく関係が形成された。以降、互いに支え合う関係が継続し、日常的な交流が生まれた。E さんは以下のように語った。

同じ小区に住んでる人で、グループで葉酸が欲しいって書いてたんだよね。妊婦ならだいたい分かるけど、葉酸って普通は妊婦さんしか飲まないから、「あ、妊娠してるんだな」って思って。で、私がその人の WeChat を追加して、「私持っているからあげるよ、妊娠してるの？何か月？」って聞いたの。その後、その人が家でまんじゅう作ってて、「牛乳ある？」って聞かれたから、うちの旦那に持って行ってもらったの。そのあと、その人も自分で作ったエッグタルトをくれたりして。

（質問：関係は変わったと思いますか？）

今は会ったらお互い元気よく挨拶するし、何かあったら助け合う感じ。知らない人よりは全然仲良いけど、友達ほどめっちゃ親しいってほどでもなくて、その中間くらいかなって思う。で、もう子どもも産まれたから、時々一緒に小区で遊ばせたりして、お菓子を分け合ったりもしてるよ（E さん）。

この事例では、特殊物資（葉酸）の交換が、単なる物質的支援ではなく、交換者の共通身分を象徴的に浮かび上がらせ、信頼の基盤を形成した。同様に、G さんや J さんからも、特殊物資の共有を契機に長期的な関係を維持した事例が確認された。特殊物資が匿名的なグループ交流から個人レベルのつながりへ移行する契機となり、関係の持続を生んだ点が特徴的である。特

殊物資により形成された関係は、単なる一時的な支援を超えて、個人間の持続的なつながりを生む可能性を示唆している。

すなわち、特殊物資は匿名的なグループ内のやり取りを、個人同士の相互認知と直接的接触（友達追加）へと接続する「シンボリック」として機能し、その過程で形成された信頼は SC として蓄積された。結果として、ロックダウン解除後に多くの関係が希薄化するなかでも、当該関係は日常的な小規模の返礼や交流へと展開し、一定の持続性を獲得した。同様の傾向は G さんと J さんの語りにも確認され、特殊物資の共有が共通属性の明示を通じて関係を固定化し、以後の関係維持を支える資源（SC）として残存しうることが示唆される。

5.3.2 危機対応から日常的な活動への機能転換

さらに、メゾ・マクロレベルでは、小区 WeChat グループという連絡手段の存続、團購をめぐる創発的規範、団長等の役割経験、近隣に対する「頼ってよい」「応じるべき」という実践的信頼性は、解除後も潜在的資源として残存し、必要に応じて再動員されると考えられる。

実際に、ロックダウン解除後も、当時の「團購」の習慣が消えず、むしろ地域の生活インフラとして定着された事例が存在する。例えば、P さんは、ロックダウン期間中、自ら団長となって住民を組織し、物資の共同購入を行っていた。解除後、彼女は夫と小区入口で小売店を開業し、その店舗を基盤にロックダウン期からの團購ビジネスを現在も続けている。また、小区における日常的な交流の場として存在している。

以上のことから、個々人の互助行為というミクロな連帯の一部は、日常への回帰とともに希薄化しており、その点では「災害ユートピア」と共通の性格を帯びている。しかし、小区（メゾ）の次元に目を向ければ、封鎖下に形成された関係性は失われていないと言える。構築された信頼（およびそれに付随する規範・ネットワーク）は「資源」として小区（内）に定着する。このように、信頼が、一時的な強い感情を超えて社会構造の一部へと組み込まれた事実は、それが単なる「ユートピア」に留まらない、SC の蓄積であることを明示している。

加えて特殊物資の交換を契機に、一部の関係が解除後も維持される例が確認された。ロックダウン下では、近隣住民間に潜在していた共通属性が顕在化し、互助を通じて信頼や特定のネットワークとして定着したと考えら

れるため、この変化は「SC の構造的な再編」と呼ぶことができるだろう。

6. 結論

本研究のリサーチ・クエスションは、「武漢ロックダウン」において、住民間の互助行為はどのように発生・展開し、それが社会関係の形成と変容にどのような影響を及ぼしたのかであった。分析により、以下の 3 点が明らかとなった。①物質的交換と非物質的支援が併存し、一般交換を基盤とした無償的な互酬性が観察された。②WeChat グループを媒介にした情報共有や贈与行為が、短期間のうちに信頼・規範・ネットワークを生成し、社会的連帯を強化した。③特殊物資をめぐる交換が、共通の属性や境遇を可視化し、関係の持続性を高める契機となったことが確認された。そのため、住民による自発的な互助が、制度的支援の空白を補完すると同時に、共同体意識の醸成、個人の社会的関係の形成と継続に寄与していた。

また、SC の短期間での急速な生成は、通常の世界関係形成では特異な現象である。通常、SC は長期的な交流や反復的な相互作用を通じて徐々に構築されるが (Coleman 1988)、ロックダウンという危機下で、一般交換を通じてわずか数週間で信頼とネットワークが形成されたことは注目に値する。一般交換は、近隣住民間の緩やかなつながり (弱い紐帯) を基盤とし、多様な情報や資源の拡散を促進する利点を持つ。しかし、弱い紐帯は信頼の強度が低く、関係の持続が難しいため、危機終了後の平常下で脆弱性を露呈しやすい。そのため、災害研究における今後の課題として、危機後の長期的な追跡調査や、他地域との比較を通じて、SC の持続メカニズムを解明する必要がある。

本研究の成果は、今後の災害への備えに対して以下の示唆を与える。まず、災害時における住民自発的な互助を制度的に支援する仕組みを整えることが期待される。王ほか (2019) が指摘しているように、災害時には情報を集約・発信する「場」が非常に重要である。そのため、具体的には、オンライン・プラットフォームを活用した物資の交換を公式に位置づけ、情報の効率性を担保する方策が求められる。

また、コミュニティ内部の弱い紐帯を強化することは、災害下の情報流通

や資源動員の鍵となる。そして、非常時の迅速な互助を可能にするために、日常からの地域交流や信頼関係の構築が求められるのである。阪神・淡路大震災の時には、救助された人の 8 割以上が地域の方々の助け合いにより救助されたと言われている（内閣府 2003）。しかし、このような互助やボランティア活動の土台を醸成するには、事前に蓄積された基盤が必要である（陳 2024）。優れた既存の人と人の繋がりがあるからこそ、緊急時に「レジリエンス」がもつ力が発揮されるからだ。

さらに、「個別ニーズ」を把握し、きめ細かな支援策を設計することが、互助関係を深化させるうえで不可欠である。例えば、「個別ニーズ」専用の支援グループを整備し、これらのニーズに重点を置くことで、住民間の互助行為を促進し、災害後も関係性が持続させることが可能となる。これにより、SC の蓄積も期待できるだろう。

7. おわりに

本研究は筆者の先行研究に続く形でありながら、互助行為を通じた社会関係形成のメカニズムに焦点を当てた点で新たな視座を提示する。住民の「生の声」は、非常時における市民的連帯と個人の社会的関係の形成過程を照らし出すものである。そして、「生の声」から得られた知見は、今後発生しうる災害における共助体制の設計において活用することが望まれる。そのため本研究が、コミュニティの「レジリエンス」の向上、ひいては人を慮る共生社会の実現のための一助となることを期待したい。

ただし、本研究にはいくつかの限界が存在する。まず、インタビューはロックダウン終了から 3～4 年を経た後に行われたため、対象者の語りには記憶の風化や再解釈の影響が含まれる可能性がある。また、本研究は限定的なサンプルに基づく探索的分析にとどまっている。客観性と普遍性の観点から、さらに多くのサンプル群から考察する必要がある。これらは今後の研究の課題としたい。

注

- (1) ロックダウン（英語:Lockdown）とは、危険や差し迫った脅威・リスクなどを理由に、特定地域から出たり、その中を移動したりすることが自由にできない緊急の状況をいう（Cambridge University Press 2020）。
- (2) 中国語の「武汉封城」は、中国語圏において固有名詞的に用いられ、コロナ感染症拡大防止のため 2020 年 1 月 23 日から 4 月 8 日まで武漢市で実施された都市規模の移動制限を指す呼称として定着している。よって、本論文では日本語訳として「武漢ロックダウン」を用い、「武漢市でのロックダウン」等の一般的表現は採用しない。
- (3) 「小区」とは、高層集合住宅が集団を成して連なり、生活に必要な施設・店舗を伴った市内の居住地区である。中国都市部の住宅がほぼ「小区」という単位ごとに分かれ、区切られている。日本の「団地」と似ているが、住宅の安全を守るための措置として、「小区」は塙で囲まれた独立した区域で、平常時でも自由に出入りできなくなっている、など複数の点で異なる特徴がある。
- (4) 本稿の対象である「互助」とは、ロックダウン下で生じた課題（物資不足、情報不足、移動制限、心理的不安等）に対し、近隣住民が自発的に行う支援実践の総称である。
- (5) 團購とは団体購入のことであり、小区の WeChat（中国のメッセージアプリ、日本の LINE に相当）グループが発起し、共同で物資を大量購入する取り組みである。グループにおいて、各世帯が必要とする物資を団長という調達の組織者が取りまとめて発注し、商品が到着したら、団長は住民に個別に連絡を送り、住民は指定の場所で物資を受け取る。

参考文献

- 渥美 公秀 2017「災害ボランティア論の再構築に向けて」『災害と共生』1(1) pp.3-7。
- 稲場 圭信 2011『利他主義と宗教』弘文堂。
- 稲葉 美里・高橋 伸幸 2012「社会的交換の形態が社会的連帯に及ぼす影響の比較」『心理学研究』83(1) pp.27-34。
- 稲葉 陽二 2011『ソーシャル・キャピタル入門——孤立から絆へ』中央公論新社。
- 王 文潔・稲場 圭信 2019「災害対応における創造的即興—熊本地震被災地の実践を事例に—」『災害と共生』3(1) pp.57-69。
- 大久保 敏彦 2021「COVID-19 と都市封鎖」札幌市医師会『札幌通信』pp.24-25。
- 大津山 堅介・齋藤 悠介・小松崎 暢彦・石井 沙知香・松本 慎一郎・竹中 大貴・廣井 悠 2020「COVID-19 に対する都市封鎖の類型化と課題—主要感染拡大国における暫定的事例研究」『都市計画論文集』55(3) pp.1350-1357。
- 小川 真世・オガワ マサトシ 2021「アナキズムと主体の回復—「災害ユートピア」を恒常化するために—」『人間学論究』(4) pp.16-45。

- 清田 佳美 2023 「コロナ禍における高齢者介護施設入居者とのオンラインコミュニケーション」『東洋大学紀要 自然科学篇』 67 pp.65-80。
- ソルニット, レベッカ 2010 『災害ユートピアなぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』 高月 園子訳、亜紀書房。
- 陳 子昀 2024 「ロックダウンが災害弱者へ及ぼす影響に関する研究—武漢市を事例に—」『共生学ジャーナル』 8:117-143.
- 内閣府 2003 『平成 15 年版防災白書』 <https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h15/bousai2003/html/honmon/hm130300.html> (2025/9/29 アクセス)
- 野田 隆 1990 「災害時における組織行動と組織変動」『組織科学』 23(3) pp.34-42。
- 松本 麻希・太田 秀樹 2021 「新型コロナ禍 (COVID-19) とメンタルヘルスに関する一考察—感染拡大に伴うストレスとパーソナリティ特性からの検討—」『西九州大学子ども学部紀要』 (12) pp.12-23。
- 三谷 はるよ 2015 「一般交換としての震災ボランティア—「被災地のリレー」現象に関する実証分析—」『理論と方法』 30(1) pp.69-83。
- Blau, Peter Michael. 1964. *Exchange and Power in Social Life*. (=『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』 間場 寿一・居安 正・塩原 勉訳、新曜社、1974 年) Cambridge University Press. 2020. Lockdown. In Cambridge Dictionary. <https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/lockdown> (2020/7/6 アクセス)
- Coleman, James S. 1988. Social Capital in the Creation of Human Capital. *American Journal of Sociology*. 94(Supplement): S95-S120.
- Ekeh, Peter P. 1974. *Social Exchange Theory*. Harvard University Press. (=『社会的交換理論』 小川 浩一訳、新泉社、1980 年)
- Gillmore, Mary R. 1987. Implications of Generalized Versus Restricted Exchange. In Karen S. Cook (ed.). *Social Exchange Theory*, pp. 170-189. Newbury Park, CA:Sage.
- Granovetter, Mark S. 1973. The Strength of Weak Ties. *American Journal of Sociology*. 78(6): 1360-1380.
- Hawkins, Robert L., and Maurer, Katherine. 2010. Bonding, Bridging and Linking: How Social Capital Operated in New Orleans following Hurricane Katrina. *The British Journal of Social Work*. 40(6):1777-1793.
- Homans, George Caspar. 1961. *Social Behavior: Its Elementary Form*. London: Routledge & Kegan Paul. (=『社会行動-その基本形態』 橋本 茂訳、誠信書房、1978 年)
- Lévi-Strauss, Claude. 1949. *Les Structures élémentaires de la parenté*. New York: Mouton de Gruyter. (=『親族の基本構造』 馬洲 東一・田島 節夫訳、番町書房、1977 年)
- Molm, Linda D. Collett, Jessica L. and Schaefer, David R. 2007. Building Solidarity through Generalized Exchange: A theory of reciprocity. *American Journal of Sociology*. 113(1): 205-242.

- Putnam, Robert D. 2000. *Bowling alone : the collapse and revival of American community*. New York : Simon & Schuster Paperbacks. (= 『孤独なボウリング: 米国コミュニティの崩壊と再生』 柴内 康文訳、柏書房、2006 年)
- Sahlins, Marshall David. 1974. *Stone Age Economics*. New York: Aldine. (= 『石器時代の経済学』 山内 昶訳、法政大学出版局、1984 年)
- Shibutani, Tamotsu. 1986. *Social Processes: An Introduction to Sociology*. University of California Press.
- Titmuss, Richard M. 2018. *The Gift Relationship: From Human Blood to Social Policy*. Policy Press.
- Zhou, Youjia, and Dong, Chen. 2023. Nourishing Social Solidarity in Exchanging Gifts: A study on social exchange in Shanghai communities during COVID-19 lockdown. *Humanities and Social Sciences Communications*. 10(1): 1-11.
- 武漢市衛生健康委員会ホームページ 2020 http://wjw.wuhan.gov.cn/ztl_28/fk/flfg/ (2020/7/6 アクセス)